人間社会デザインコース，平和デザインフォーラム

文献講読・フィールドワーク結合型授業実践の諸課題

社会科教育専修・矢澤知行

１．授業の概要

「平和デザインフォーラム」は，総合人間形成課程・人間社会デザインコースにおいて基幹的な位置を占める必修の授業科目である。コース所属の学生は，１年次後期から３年次後期にかけて継続的に「地域」「福祉」「平和」いずれかのデザインフォーラムに属して学ぶことになっている。このうち,平和デザインフォーラムは,“平和に関する理論や思想と平和構築のための実践的な活動を結びつけながら，平和な人間社会のデザイン（構想）に参画するための学識を身につける”ことを授業の目的として掲げている。授業の担当は，矢澤知行（歴史学，フォーラムリーダー），松野尾裕（経済学），福田喜彦（社会科教育）の３名で行い，原則として全員が毎回の授業に参加している。受講生は計 10 名，学年別の内訳は，１年生５名，２年生３名，３年生２名であった。

本報告では,2011 年度後学期に実施した「平和デザインフォーラム」について取り上げ，文献講読とフィールドワークを結合させたプロジェクト研究型式の同科目について，授業実践上留意した点や授業評価の結果などについて述べていきたい。

今回の授業は，文献講読と長崎フィールドワークを中心に構成した。その具体的な流れは次の通りである。

まず，フィールドワークに向けての準備段階として,長崎に関する基礎的な文献(高橋眞司・船越耿一編『ナガサキから平和学する！』法律文化社、2009 年）を講読しながら，受講生全体としての研究課題および個人の研究課題を明確化させることから始めた。

2011 年 12 月 17 日から 18 日にかけて実施した長崎フィールドワークでは，長崎原爆資料館，国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館，岡まさはる記念長崎平和資料館，ナガサキピースミュージアム，長崎歴史文化博物館，日本二十六聖人記念館などを，グループないし個人単位で訪問し，各自の関心に即して，展示を参観したり，関係者にインタビューを行ったりした。

フィールドワーク終了後は，再び文献講読を行った。受講生は，フィールドワークで調査研究した内容について考察をさらに深めるため，各自，関連する研究文献を 1 件選択し，その内容について授業の場で紹介したうえで，質疑応答や討論を行った。なお，研究文献を選択する際の参考資料として，授業担当者が広義の「平和」に関する文献リスト（全 90 件）を提示した。

そして，一連の研究成果は，2012 年 2 月 21 日実施の「地域」「福祉」「平和」の 3 デザインフォーラム合同の研究報告会で発表した。

２．アンケートの実施と質問項目

本報告を作成するにあたり,「授業改善のためのアンケート」を実施した。全 15 回の授業の最終回にあたる 2012 年 2 月 17 日にアンケート用紙を配布し，回収した。

アンケートの質問項目は下記の 8 点であり，いずれも 5 段階評価による調査を行った。また，授業に対する感想や具体的な要望を記入するようための自由記述欄も設けた。

質問項目

①【あなたの意欲】この授業に積極的に取り組んだ。

②【シラバスの利用】授業の受講に先立ち，シラバスを読んだ。

③【シラバス通りの授業】授業はシラバス通りに行われた。

④【関心・興味】この授業で取り上げられた事柄について，関心・興味がわいた。

⑤【有用性】授業内容は自分の将来の進路，人生にとって役立つと思う。

⑥【教員の意欲・熱意】教員の授業に対

する意欲・熱意を感じた。

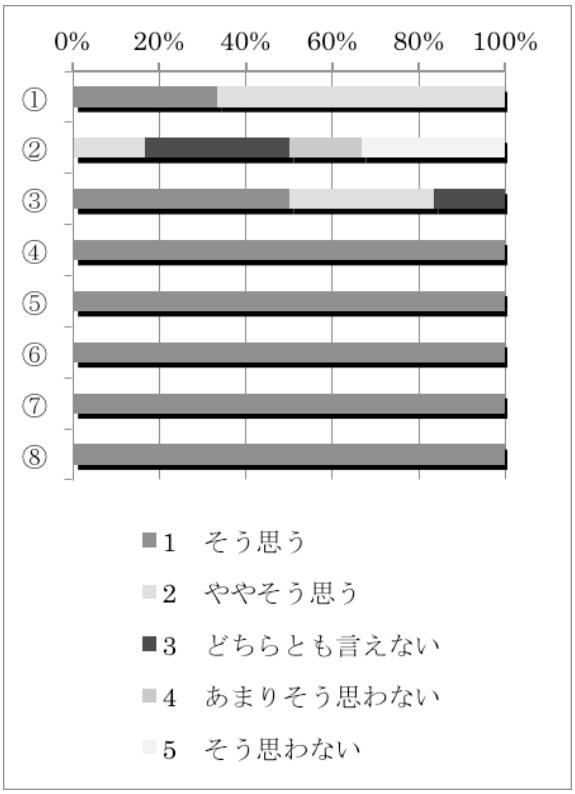
⑦【満足度】本授業は全体として満足のいくものだった。

⑧【おすすめ度】本授業の受講を他の学生や後輩にすすめたい。

３．アンケートの結果

アンケート用紙は受講生のうち当日出席者全員に配布し，6件の有効回答を得ることができた。アンケート結果を整理したのが次のグラフである。

平和デザインフォーラム　アンケート結果



４．反省点と今後の課題

アンケートを通じていくつかの反省点を見出すことができた。

まず，②シラバスの利用，③シラバス通りの授業の２項目に関して，消極的な評価を示した受講生が多かった点が注意を引く。今回,フィールドワークの候補地について，受講生が確定した時点で受講生と相談して決定するという方法を採った。このため，シラバスの作成段階で，授業に関する具体的な内容を記すことができなかった。しかし，受講生にとっては，授業内容を事前に詳細に理解した上で登録したいという要請があることも事実である。仮に授業スケジュールの詳細を示すことができないとしても，今後，シラバスに一定の工夫を凝らす必要があるだろう。

また，①意欲の項目についても期待した回答結果が得られなかった。これはおそらく，アンケートの自由記述欄に“1 限で，遅刻･欠席が多かったのが気になりました”というコメントがあったことからもわかるように，遅刻または欠席した受講生自身による反省の気持ちを反映したものと推察される。1 限の時間帯に配置されていたとはいえ，受講生がコースの基幹科目に対して意欲を十分に喚起できていないとすれば，見過ごせない問題である。④関心・興味から⑧おすすめ度までの項目について，いずれも肯定的な評価が得られているだけに，受講生が当事者意識をもって意欲的に臨める授業空間をつくる，という基本的な課題が浮き彫りになった感がある。

本授業は，文献講読とフィールドワークから構成されており，後者については全員活動的に参画していた印象があるが，前者は必ずしもそうとはいえなかった。受講生の自主性･積極性を育てることを意図して，毎回の授業時，司会進行を輪番制で学生に委ねるなど，担当教員は一歩引いた姿勢で臨んでいた。だがそれでも，文献講読担当の受講生だけでなく，それ以外の受講生からの質問や意見をうまく引き出し，積極的に討議に参加させることは難しかった。おそらく，受講生は各々フィールドワークを通じて多くのことを学び,考えたであろう。しかし，文献講読を経て，その考察内容を質疑応答や討議の場で明確に表現する段になると，遠慮や躊躇があってか，それがうまくできない。そうしたバリアを取り払うためには，授業運営上，いっそうさまざまな工夫や配慮が必要だと考えられる。それらの条件を満たすことによって，受講生の授業に対する当事者意識も確立していくものと考えられる。文献講読とフィールドワークを結合させたプロジェクト研究型式科目の課題は,まさにそこにあるといえよう。